

花鳥諷詠選集

稲畑汀子選

特選五句

雨がちに了はつてしまふ月の秋

枚方石橋 玲子

着ぶかれて荷のごとく乗るエレベーター

北海道 伊藤 貞子

活けられし芒にも風見えにけり

白山西 登美枝

大綿の無ささうで有る命かな

箕面 須知 香代子

落葉掃く音に目覚めて落葉掃く

金沢村 上 秀 吾

二句短評

一句目―仲秋の名月に独特な期待を持つ我々俳人である。名月を中心に、待宵、名月、十六夜、立待月、居待月、臥待月、更待月と夜々名前を変えて月を仰ぐのであるが、期待に反して夜々雨がちに月への期待が閉ざされてしまったのであろう。夜々空を仰いで月への期待が閉ざされた年を描いて、それも又秀句となった。二句目―寒い頃である。つい着ぶかれて、エレベーターにまるで荷物のように場所をとって乗って仕舞った作者である。少し恐縮している様子が想像され、冬の着膨れた人々の乗り合わせるすがたが描かれた。

入選六十句

禁酒して老の励める夜学あり 相模原 木村 享史

華やかも寂しさもあり花野往く 神戸 堅田サチエ

稜線をくつきり見せて月現るる 金沢 北川まつ子

妻の名も忘れし夫と日向ほこ 加賀 堀口 紀子

忌の供華に十月の風添へられし 香川 福家 市子

月の影つれて歩いて帰りけり 由布 立川さよ子

鷹渡る山に静寂ありにけり 伊万里 田中 南嶽

旧家てふ静かな暮らし煖炉燃ゆ 輪島 向 佐ち子

カーペットの端につまづく夜寒かな 福山 久保 絃子

わが町を抜ければ阿蘇路秋高し 熊本 池原 倫子

もう少し足を伸ばさうホ句の秋 奈良 水上 末子

横川にも遊びし日あり西虚子忌 柳川 田中 貞子

落葉踏む音の晴れたり曇つたり たつの 竹内 澄子

風雨去り息づく山河鳥渡る 浜田 田中由紀子

露むすぶ一草も無き災禍あと 大宰府 柴田慧美子

冬近きことに畏れをいだきつつ 横浜 八城 敬子
 気心の通ふ句会の爽やかに 高知 前田まこと
 黄落や一気に埋まる小さき町 市原 鈴木 南子
 快晴の端に秋冷ありにけり 三原 成未知歌子
 枳殻邸訪ひし茶の花日和かな 長岡 笠原佐千子
 エプロンにハンドクリーム主婦の冬 高知 岡林知世子
 無理利かぬ齢となりて冬に入る 松阪 大西 さよ
 菊花展育てし苦勞聞かずとも 高松 多田 照代
 薪積みて水禍の里の冬構 島原 三好 立夏
 小さき賞受けしは遠き文化の日 大川 諸富 芳子
 行秋のよき師よき友よき日和 豊田 杉本 淑代
 拾ひ来てよりの手間隙栗ごはん 高知 中平 孝子
 蔓を引く落つる零余子と知りながら 鹿児島 所崎 玲子
 新米を握り一と日の一人旅 札幌 押野 美江
 まづ物を整理してより冬仕度 長岡 榎本清津子

帰心はや鷹渡る空仰ぎては 姫路 大谷 千華
 気づかずみな通り過ぐ花八手 島原 高比良映子
 人を呼び人を見送る菊人形 青森 七戸富美子
 子規虚子の絆深きを芭蕉の忌 稲城 尾上英美子
 ゴンドラの空より木の葉時雨かな 神戸 小柴 智子
 今日といふ日を好日に冬支度 敦賀 村中 聖火
 白山に雪来て急ぐ畑仕舞 金沢 荒谷みえ子
 静かなる暮し弾ます小鳥来る 浜田 高村美都子
 台風の最中受講の日となりぬ 豊後高田 井上 敏子
 山茶花や君の癒ゆるを析るのみ 千葉 鈴木真沙枝
 爽やかやお見舞に来て励まされ 山口 徳田 千鶴
 秋の雨今日も雨読となりしかな 倉敷 小幡 恒雄
 降り積る落葉踏む音碎く音 神戸 横山 脩子
 庭手入れより済ませゆく冬支度 高松 藤川 滋子
 冬めける後姿を見送りぬ 高松 久本 照代

人に遠く居たくなる日の野路の秋 鹿兒島 有島 洋子
 落葉踏む音に振り向いても一人 吹田 田中美佐子
 地の果に燃ゆる色あり珊瑚草 長岡 安井 里子
 風よりも遠き音色の瓢の笛 松山 門田 智子
 木の葉髪視力聴力記憶力 大阪 木須嘉代子
 怪我の足歩いてくれて旅小春 豊中 松野 綾子
 ひたすらに風に急かされ末枯るる 高知 岩佐 とよ
 山茶花の咲き初めし庭君の亡く 四國中央 豊田みゆき
 側にゐるだけの看取や十二月 福山 早間 幸枝
 人惜しみ行秋惜しみをりにけり 芦屋 村田 明子
 待ちくるる人ありて旅冬ぬくし 島原 八木 花栗
 人が木に木が人に見ゆ冬木立 米子 前田 千
 山男来て小屋の炉を開きけり 国東 真城 蘭郷
 長寿まだほんの入口菊の酒 札幌 吉村 佳峰

● 鈴木しどみ 選

特選五句

人の世話ばかりしてゐる木の葉髪
 指差せば指先に消え時雨虹 高松多 田 てい子
 太陽はときに血の色冬夕焼 高松中 村 仁
 ショールとる所作美しく挨拶す 倉敷江 本 節子
 マスクして光つてをりぬ監視の目 堺 松 本 みゆき
 高松白 根 純 子

二句短評
 一句目——木の葉髪とは、どこか人生の哀愁を感じる淋しいイメージの季題であり、散つてゆく木の葉にたとえたのは、日本人の感性であらう。ところがこの句、生き生きとした一人の人の生きざまがあり、木の葉髪であるが故の、温かな生命力に溢れている。
 二句目——時雨虹は、しぐれつつ架かることもあり、すぐに消えてしまう儂さがある。指を差せば、もうすでに消えかかろうとする。消えたものの美しさが、指先にいつまでも残る。残像。余韻。

入選六十句

逢ふも合掌去るも合掌生身魂 福岡 古賀 伸治
 雨がちに了はつてしまふ月の秋 枚方 石橋 玲子
 国後の島影近き野菊晴 八王子 小町谷滋子
 榎檀熟れどれもしたたかなりし顔 倉敷 久保スガエ
 病棟の夜寒に灯る非常口 福島 坂野 洋三
 着ぶくれて荷のごとく乗るエレベーター 北海道 伊藤 貞子
 街角にジャズの聞える良夜かな 仙台 加賀谷蕉雨
 北国の十一月の覚悟かな 平川 丹野 慶子
 石狩の冬はそこまで年尾句碑 札幌 中川 洋子
 すぐ止まるけれどすぐ翔つ糸蜻蛉 大津 王仁 暉文
 秋の日を塗り込んである写生の子 宇部 永田 芳子
 投函の音のことりと秋の声 太宰府 川路 泰子
 おはじきの少女に返る椿の実 久留米 秋吉 鈴子
 家々の木犀の香を繋ぐ径 香川 横井 義子
 すべすべとしつとりとむべてのひらに 羽生 塩田 章子

あれこれと選び結局着ぶくれる 市川 抜井 諒一
 滔々と川音下る霧の野路 福知山 小林 和子
 入口も出口も村の案山子展 豊後高田 木村 和人
 山からの日は金柑に金色に 高知 栗坂 海馬
 山中のどこか生き生き木の実降る 高崎 清水 教子
 一と歛に生まれし音や落し水 阿南 湯浅 芙美
 雲に雲乗せて重しや冬の空 名古屋 中野ひろみ
 言の葉を持たぬ静かさ菊人形 高崎 津久井洋子
 すれ違ふ籠の気になる茸採り 鳥取 砂流 育子
 茶事案内出して炉開完了す 東京 梅野 ぎん
 快晴の端に秋冷ありにけり 三原 成未知歌子
 美しきことが悲しき毒茸 神戸 岩水ひとみ
 落鮎やこの先平家谷と言ふ 富山 高城 玲子
 雨ぐせの風ぐせの萩括りけり 富山 片桐 久恵
 吊るす物多き山家の暮の秋 伊賀 藤井 光子

木管も金管もあり小鳥くる 福津 柴田佳津子
 晩秋の湖の沈黙聞いてをり 松江 森木 八潮
 煌めきの消えては現るる月の波 高崎 並木 秋野
 月に舞ふ海に張り出す高舞台 廿日市 齋藤 金二
 初時雨たらひ舟にも容赦なく 小千谷 大矢あきこ
 久し振り履くハイヒール秋高し 田川 藏本 聖子
 新米を握り一と日の一人旅 札幌 押野 美江
 指出せば握る赤子や冬ぬくし 福岡 梶原 敏子
 終バスに焼詣の香と乗り合はす 太宰府 野田 杉子
 人を呼び人を見送る菊人形 青森 七戸富美子
 ゴンドラの空より木の葉時雨かな 神戸 小柴 智子
 飛石の角みな丸ろく初時雨 伊賀 羽根 千恵
 鈴の音が先に着きたる秋遍路 宇佐 尾崎 陽子
 落葉掃く音に目覚めて落葉掃く 金沢 村上 秀吾
 朝時雨サーファー浜に立ち尽す 鳥取 宮脇 典子

大橋を渡れば阿蘇の初時雨 大牟田 前原八寿之
 白湯吹いて冷ます彼方や渡り鳥 宇佐 磯永喜八郎
 病窓に冬日どんどん溢れくる 千曲 瀬在 光本
 庭仕事振りを見に出る炬燵かな 日野 井出 重美
 エンディングさらりと告げぬ月の夜 鹿児島 上間喜久子
 木枯を来て手鏡に直す髪 東京 岡田 圭子
 音しほりひとりジャズ聞く秋の夜 春日 牟田 節子
 もう少し頑張るための夜食かな 東京 小作 紀子
 鳥渡る国籍などはありませぬ 長野 勝山 学
 初時雨海に紛れてしまひけり 福知山 松山ひとし
 すれちがふお茶会らしき秋袷 福岡 山口 裕子
 お出かけは裏地のおしゃれ秋の蝶 長野 牧野 菊生
 ロボットが友達となる文化の日 高砂 中水 大介
 鹿の声透きとほる夜の不整脈 春日 本田 久子
 副菜は紅葉いつさい塩むすび 長野 西澤ひろみ